

## 構文の確立と語用論的強化： 「全然～ない」の例を中心に\*

尾谷昌則  
東北学院大学

### <要旨>

副詞「全然」は否定表現と共起するのが正しい用法である、という規範意識が昭和20年頃から生まれた。本論では、この規範意識はなぜ生まれ、なぜ定着したのかについて、語用論的推論／語用論的強化という視点から論じる。また、近年多く見られる「“全然”＋肯定」表現が昭和初期までの<語彙否定用法>とは違い、<文脈想定否定用法>とでも呼ぶべき新たな機能を有する「構文」として確立されつつあることを論じる。

【キーワード】： 否定、文脈想定、程度強調、語用論的強化、構文

### 1. はじめに

若者言葉というものは、しばしば中高年世代からの批判に晒される運命にある。しかし中には、一過性の流行とは呼べない現象も存在する。その一例が「“全然”＋肯定表現」である。この表現に対する批判は、半世紀以上も前から存在するのである。

- (1) 近頃気になるのはよく、「全然よくできるの。」式のコトバを使ふことである。「全然」とは否定の意味であつて、「全然出来ない。」とか、「全然駄目だ。」と云ふのならわかるが、これでは意味を成さない。(小堀杏奴「思ひ出」『言語生活』昭和28年3月)
- (2) が、この呼応のあやまりは、これまた戦前からあった。私は中学校時代(昭和二年—五年)にさかんに使った記憶がある。(金田一 1966:131)

しかし北原(2004)などにも紹介されているように、戦前の小説にも「“全然”＋肯定表現」は頻繁に使用されていたという事実がある(下例参照)。それゆえ、「“全然”は否定と呼応するのが正しい」という意識に基づいた上記のような批判がどうして湧き起こったのかという疑問が生じる。

- (3) a. 私は(中略)殿様に全然騙されましたのでございます。(尾崎紅葉『金色夜叉』1897)  
b. 新聞に在る通だけれど、不具になるやうな事も無いさうだが、全然快くなるには三月ぐらゐはどんな事をしてても要るといふ話だよ。(尾崎紅葉『金色夜叉』1897)  
c. 暴風雨に左様して居られては済むまい、瓦が飛ぶ樹が折れる、戸外は全然戦争のやうな騒ぎの中に、汝の建てられた彼塔は... (幸田露伴『五重塔』1890)

小池(1994)は「全然」が否定と呼応すべき表現であるという規範意識を<迷信>と呼んだが、本稿のテーマの1つは、どうしてそのような規範意識が生まれたのかを探ることである。規範意識が定着したということは、「“全然”＋否定表現」が1つの「構文」として確立したと見ることもできるため、Langacker(1999)の動的使用依拠モデル(Dynamic Usage-based Model)や、Fillmore(1988)、Croft(2002)、Tomasello(2003)といった構文文法(Construction Grammar)の観点から見ても非常に興味深い。

本稿のもう1つのテーマは、現代語でも批判されている「“全然”＋肯定表現」が以前のそれと同じ意味・機能で使用されているのかどうかである。若者言葉を「規範から外れる間違

った用法」と見るか、それとも何らかの動機付けによって「規範を越えて新しく生み出された用法」と見るかは意見の分かれるところであるが、少なくとも本稿では後者の立場に立ち、「全然」が「文脈想定否定」という新たな語用論的機能(手続き的意味: Wilson and Sperber 1993, Sperber and Wilson 1995) を獲得しつつあると主張する。

## 2. 規範意識の発生と定着

まず「全然」の呼応に対する<迷信>についてであるが、これにはいくつかの先行研究が存在する。梅林(2000)は、第二次世界大戦後のアプレゲール批判の材料として規範意識が利用されたのが始まりとしているが、宮内(1961)は、昭和10年(1935年)頃に「当時の自称文化人仲間」が「新語を流行させようという意識」をはたらかせて用いたのが始まりであるとしている。柄沢(1977)は、大正末期に芥川が「とても+肯定」が本来の用法ではないと指摘した影響で、当時の知識人達の間に「全然+肯定」も誤用だという<迷信>が広まったとしている。宮内(1961)は、「全然彼女には冷淡だった」という芥川の文を「全然」に対する呼応を忘却した誤用」と書いている。しかし1961年は梅林(2000)のいうアプレ批判が盛んだった時期にあたるため、宮内も<迷信>に影響されていた可能性がある。ただし、梅林のアプレ批判説も資料が乏しいため、完全に証明するのは困難であろう。<sup>1</sup>

これに対し、あなたがち<迷信>とは呼べないとするのが新野(1997)の説である。新野は「全然」がかかる先の表現について明らかな否定表現であるA類から、徐々に否定のニュアンスが弱まるF類までの6段階に分類し、それぞれの用例数を集計している。そして、<迷信>に違反するような肯定表現や積極的なプラス評価の例がF類のごく一部にすぎないので、あなたがち「迷信」とも言えない(新野1997:282)としている。しかし裏を返せば、F類のごく一部とはいえ、そのような表現が存在することに対して十分な説明がなされていない。

そこで本研究では、「青空文庫」(<http://www.aozora.gr.jp/>) から作成した自作コーパスを用い、「全然」の用法の変遷を調べた。収集したテキストを年代別に分類した結果、以下のようデータ量となった。

| テキストの年代 | 1890    | 1900    | 1910    | 1920    | 1930    | 1940    | 1950    | 1960    | 1970    | 1980    |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| データ量    | 2.35 MB | 6.59 MB | 10.0 MB | 5.89 MB | 8.20 MB | 6.20 MB | 2.15 MB | 8.99 MB | 4.96 MB | 3.17 MB |
| ファイル数   | 42      | 90      | 112     | 149     | 132     | 101     | 12      | 18      | 11      | 7       |

表1: 収集したデータ量

今回の調査では、「全然」がかかる先の表現により「否定」「疑似肯定」「肯定」の3つに分類した。分類に厳密を期すため、述部に「ない」もしくは「ず」を含むような純粋な否定文の場合のみ「否定」類とした(下例4)。たとえ接頭辞に「非」「反」「不」などを伴う表現が含まれていて、意味的には否定的なニュアンスの述部であっても、述部の最後が「～です」「～だ」のような肯定形になっている場合は、形式的には全て肯定文の一種と見なし、「疑似肯定」類とした(下例5)。<sup>2, 3</sup> 「肯定」類は意味的にも形式的にも肯定と見なすことができる表現であり、新野分類ではF類の一部(新野が例外扱いしたもの)に相当する(下例6)。<sup>4</sup>

- (4) a. 私の体ぢや戸外の様子が全然解らないのですものね (尾崎紅葉『金色夜叉』1897)  
b. 鮎なんぞの立派さには全然くらべものになるのぢやあない。(泉鏡花『化鳥』1897)
- (5) a. 其間に酔が全然醒めて了つて (石川啄木『病院の窓』1908)  
b. 何か全然無神経で、敵の事情を探らうとはしなかつたな。(泉鏡花『海城発電』1896)
- (6) a. 私はね、何もかも全然憶えていて、 (国木田独步『恋をする人』1907)  
b. 不具になるやうな事も無いさうだが、全然快くなるには三月ぐらゐはどんな事をしても要るといふ話だよ。(尾崎紅葉『金色夜叉』1897)

以上のような基準で調査・分類したのが以下の表2, 3である。表2は各年代ごとにヒットした「全然」の使用数をまとめたもので、それが「全然」の使用数全体に占める割合は括弧内に示してある。表3は表2をグラフ化したものである。

| 年代               | 1890      | 1900      | 1910     | 1920     | 1930     | 1940     | 1950     | 1960     | 1970     |
|------------------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 肯定               | 8 (36.4)  | 30 (30.0) | 13(24.1) | 10(21.7) | 5(7.8)   | 4(4.3)   | 2(3.6)   | 1(2.0)   | 0(0)     |
| 疑似肯定             | 4 (18.2)  | 29 (29.0) | 25(46.3) | 23(50.0) | 18(28.1) | 28(30.4) | 13(23.2) | 13(26.0) | 3(7.7)   |
| 否定(ない)           | 10 (45.4) | 36 (36.0) | 16(29.6) | 12(26.1) | 41(64.1) | 60(65.2) | 41(73.2) | 36(72.0) | 36(92.3) |
| その他 <sup>4</sup> | 0 (0)     | 5 (5.0)   | 0(0)     | 1(2.1)   | 0(0)     | 0(0)     | 0(0)     | 0(0)     | 0(0)     |
| 合計               | 22 (100)  | 100(100)  | 54(100)  | 46(100)  | 64(100)  | 92(100)  | 56(100)  | 50(100)  | 39(100)  |
| 件数/1MB           | 9.4       | 10.4      | 5.4      | 7.8      | 7.8      | 14.8     | 26       | 5.6      | 7.9      |

表2: 「全然」の検索結果 ヒット数 (%)

表3から、「全然」の用法変遷を3つの時期に分けることができる。1890～1900年代の時点では、肯定表現と共起する「全然」が全体の30%以上を占めており、否定類の割合とほぼ拮抗していることから、この時期は両用法が認められる共存期と考えられる。

一方、1910～1920年代は疑似肯定が勢力を拡大する疑似肯定期である。疑似肯定類は、形式的には肯定であるが、意味的には否定であるため、肯定と否定が共存する表現である。ゆえに両者のバラ

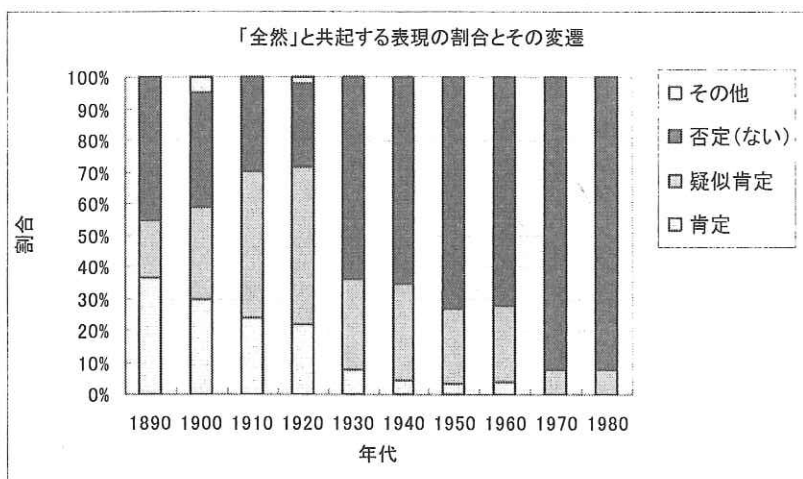


表3: 表2に基づいた年代別の使用割合

ンスが保たれていた共存期をきっかけに生まれ、発達したものと考えられる。

このバランスが崩れたのが1930年代以降である。この時期は肯定類はもとより疑似肯定類も減少し、代わりに否定類が全用例数の6割以上を占め、70年代以降は9割を占めるまでになる。どうやら「全然」は否定表現と呼応するものだ」という<迷信>はこの時期に定着し始めたと見て間違いなさそうである。つまり、梅林(2000)によるアプレゲール批判説よりも若干早い時期から<迷信>は定着しつつあったことになる。

さて、問題はその<迷信>が生じた原因についてであるが、本論では、流行や偶然に帰結させた先行研究とは一線を画し、意味論・語用論的な観点から考察する。特に本論が注目するのは、<迷信>の定着と入れ替わるように衰退した疑似肯定の存在である。同時期に起きているということは、これが<迷信>の定着と無関係ではあるまい。<sup>5</sup> 疑似肯定は形式が肯定であっても、意味は否定というねじれた表現であるが、コミュニケーションにとって重要な役割を果たすのが意味であると考えれば、形式よりも意味の側面が優先された（もしくは、強く意識された）と考えるのが自然であろう。その結果、「全然」は否定と呼応して、

否定を強調するために使用するものである」という推論が働き、それが語用論的に強化されて一種の規範意識にまで発展したものと考えられる。単なる推論であれば不安定なままであるが、それが強化されて規範意識として定着すれば、その表現の使用が安定し、生産性も高くなることが予想される。これを裏付けるのが表4である。これは今回調査したテキストデータにおける1MBあたりの「全然」の出現数をまとめたグラフである。これを見ると、1930年代以降の使用割合が急激に高まっているのが分かる。これは「“全然”＋否定」という構文パターンが規範として

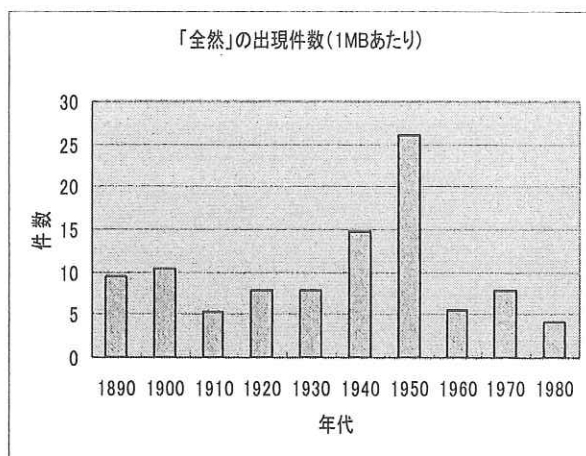


表4

定着したおかげで、表現自体が安定し、生産性が高まった結果であると考えられる。ただし、その使用割合は1960年代以降に激減している。この理由は不明であるが、梅林(2000)が論じるようなアプレ語批判の気運が1950年代に高まったことで、全然の使用が控えられたと考えることもできる。もしくは、「まったく」などの副詞に比して「全然」が口語調のニュアンスを持つという意識が定着したために、小説などの文語体における使用頻度が減少したためとも考えられる。(今回の調査対象は主に小説などの文語データである。)

### 3. 「全然」の意味が変わったのか

次に「全然」の意味について議論する。先行研究を見ると、昭和戦前の「全然」は「何から何まで、完全に」という意味であったが、「とても、非常に」という程度強調の意味は現代語に加わった新しい意味であるため、両者は異なる用法であると分析した研究が多い(松井1977、若田部1993、播磨1993、鈴木1993)。『日本国語大辞典』の第二版(2000:108)でも、意味の違いがはっきりと明記されている。

- (7) 「(4)㊦㊧は、昭和二〇年以後に現れた用法で、肯定表現を伴う点では㊦㊨と似ているが、㊨のように「残らず」「全部」の意味は含まず、ある状態の程度を強調するだけの働きである点が異なる。多くの人がこれを奇異な使い方に感じたのは、否定表現を伴わないということだけではなく、㊦㊨とは違って、「とても」「非常に」と同様、単なる程度強調に使われたということが大きな理由である。

一方、意味が変わっていないと主張する研究もある。金田一(1966:132)は、「全然いい」も、「全然欠点がないくらいいい」の意味で、否定の意味はやはり隠れて存在しているように思う」とし、意味は「まったく」のままであり、単なる「呼応のあやまり」としている。また新野(1997:278)は、「昭和戦前までも現代でも、肯定と呼応する“全然”は(否定と呼応する場合と同じく)＜完全に、百パーセント＞の意で基本的に変わっていない。五十パーセントや六十パーセントではなく百パーセントなのであるから、結果的には被修飾語句の意味を強調することになり、したがって＜とても、非常に＞と置き換えても文が成立する(しかしニュアンスは変わる)ような例が出てくる。」としている。梅林(1997)は基本的に新野に参道しているが、新野が述べた＜百パーセント＞の概念が原田(1982)のいう「十全性副詞」に相当すると紹介した上で、さらに言葉を補って「厳格に十全性が問われないような文脈では、意味が弱まり、『とても、非常に』などの、かなりの程度であるといった意にも解せる例が出

てくることになる」としている。さらに梅林は、当時の新聞記事などを根拠に「意味差に違和感を覚えた人が、当時、研究者に限らず一般にも見受けられたということになる。だとすると、なぜこういう人々が、「非常に」「たいへん」という意味に違和感を覚えたのであろうか。それはやはり新奇な意味であったからではないだろうか、と考えられてくるのである。」とも指摘している。

本論の主張も新野や梅林の主張と軌を一にする。「全然」が単なる程度強調の意味で使用されているのであれば、確かに肯定表現の一種として使用されても不思議ではないであろう。しかし「全然」の基本的な機能は、やはり否定という域を完全に脱していないというのが本論の主張である。つまり、近年よく奇異だと指摘される「全然美味しい」のような肯定表現と共起する用法も、基本的には否定に基づいたものであると考える。その根拠として、次のような例がある。

- (8) 【恋人の手料理を食べているときに「美味しいでしょう？」と聞かれて】  
 a. 「全然。」  
 b. 「とつても。」

この場合、「全然」とだけ応答した(a)の文は、「全然(美味しくない)」という否定解釈はできても、「全然(美味しい)」という肯定解釈はできない。一方(b)では、「とつても(美味しい)」という肯定的な解釈はできても、「とつても(美味しくない)」という否定解釈ができない。「とつても」は純粋な程度強調副詞としての用法をすっかり確立してしまっているが、「全然」は完全に否定の意味から脱却しきれていないため、このような違いが生じるものと考えられる。

さらにもう1つの根拠は、否定の対象になるものが何か存在していなければ「全然」を用いた文が不自然になるという事実である。例えば以下の(9)では、「この料理はまずい(かもしれない)」という想定が質問者の側に存在しており、被質問者にもそれが伝わっている。そこで被質問者は「全然美味しいよ」と応答することで、単に「美味しい」ことを肯定的に強調するだけでなく、「あなたはこの料理がまずいという想定を持っているようだが、決してそのようなことはない」ということを表明し、相手の持つ想定を強く否定しているのである。

- (9) 【「まずいでしょう？」と言われた際の返答として】  
 「これ、全然美味しいよ。」

ところが、会話の冒頭で「全然」を肯定表現と共に使用すると不自然に感じられる。

- (10) 【先行文脈がなく、会話の第一声として】  
 \*# 「これ、全然美味しいよ。」

これは、「全然」が否定であると考えれば説明がつく。会話の冒頭は、特別な場合を除けば何も際立った文脈想定が存在しない。そのような状況で「全然」を使用しても、「全然」によって否定されるべき想定が何も存在しないため、不自然になってしまうと考えられる。

「全然」による本来の否定は後続する述語を否定するものであるが、上で見たように、発話時に存在する想定を打ち消すという語用論的機能は、いわゆる手続きの意味と呼ばれるものに相当すると考えられる。例えば(11a, b)では述部にある語彙「面白い」と「美味しい」が否定されている。このような従来の用法を、本論では<語彙否定用法>と呼ぶことにする。しかし近年見られる「“全然”+肯定」表現は、述部に否定辞が存在しないことから分かるように、後続する述部の中にある語彙が否定されているわけではない。例えば(12a, b)では、「面白い」や「美味しい」といった述語が否定されているわけではない。



- (11) a. この映画は全然面白くない。  
b. このラーメンは全然美味しくない。  
(12) a. この映画、全然面白い。  
b. このラーメン、全然美味しい。

これらの表現で否定されているのは「全然」に後続する述語ではなく、発話に先行して存在する文脈想定なのである。例えば(12a)は、「この映画はそれほど面白くないだろう」という想定を持っていた人物が、実際に見終わった後でその想定を自ら否定した発話である。本論では、これを<文脈想定否定用法>と呼ぶことにする。先に論じた(9)と(10)も同様である。

他にも<文脈想定否定用法>の具体例を見てみよう。以下の例は、インターネット上の匿名掲示板 (<http://www.2ch.net/>) から採取した。左の数字はその掲示板における発言の番号／順番を表す。ページ数の制約により、会話に直接関係ない発言は省略した。まず以下の例 A であるが、これは「POD 2」と「POD xt」という2つの音楽機材について議論している文脈である。39 番の発言者は、POD2 に負けず劣らず PODxt の音も素晴らしいという想定を持っている（だから購入しようと考えている）。しかし 41 番では、2つの「全然」を使用した発言によって、39 番の発言者が有している想定を否定している。

- 39 : POD2 の JCM800 が好きで、クリーンとエフェクターに不満がある俺は xt 買うべきでしょうか？  
ブースト、ディスト、プレゼンスは切って使ってるから xt の JCM800 でも歪みは付くと妄想中…。  
41 : JCM800 は pod2 と pod-xt で全然変わっちゃってるから XT の JCM800 が好きになるとは限らないよ。俺的には JCM800 は POD2 のほうが全然良かったな～。

例 A

以下の例 B も音楽機材について議論している掲示板である。277 番の発言からは、PSA-1 という機材が古くて劣っているものだという認識が伺えるが、278 番による発言はその想定を否定している。

- 277 : いいなあ。おれなんかいまだに PSA-1 だよ。  
278 : >>277 そっちのが全然いい。

例 B

次の例 C はドライブ情報を交換している掲示板である。ここでは R285 が運転しにくい道路であるという想定が談話中に形成されつつあるが、「全然」を用いた 160 番の発話がそれを否定している。

- 155 : R285 ってきついんですか？ R105 の山道とどっちがきついんですか？  
156 : 285の方がはるかにきつい  
157 : 具体的にどのようにきついのですか？  
159 : 道狭いアップダウンきついカーブの連続 前に大型トラックがいたら悲惨  
ノロノロ運転黒煙噴き付け追い越しも出来ず  
160 : R 2 8 5 ってそんなに走りにくいかなあ？ 全然ラクチンだと思うけど・・・。

例 C

ここで注意しておきたいのは、以上の例における「全然」の意味が単なる<程度強調>ではないということである。『日本国語大辞典』(第二版)をはじめ、多くの先行研究で「全然」には<程度強調>という新しい用法が存在すると指摘されてはいるが、そのような用法はまだ十分に脱文脈化が完了しておらず、十全的否定という域を脱していないというのが本論の見解である。先にも見たように、単なる<程度強調>であれば特定の先行文脈など必要としないはずであるが、「全然」+肯定表現には、必ず否定の対象になる想定が欠かせないからである。上に挙げた例は、どれも発話時に存在する想定を否定するような文脈で使用されており、「全然」はその発話によって行われる打ち消しに対する確信度が十全であることを表明しているだけである。そこから「それほど自信を持って否定できるということは、誰が見ても確信が持てる程に両者の違い(=差)が大きいということなのだろう」という語用論的推論がなされた結果、<程度強調>という含意が解釈されるに過ぎないのである。つまり、十全性こそが「全然」の明意(explicature)であり、程度強調は暗意(implicature)でしかないのである。

#### 4. おわりに

以上、肯定表現と共に起る「全然」について考察した。データの取り方や分析の緻密さなど、まだまだ稚拙な内容であることは否めないが、「全然」の意味・用法の変遷において、語用論的な要因が非常に重要な役割を果たしていることだけは確認できたと思われる。昨年の研究発表時にはアマルガム構文や関連性への貢献といった観点からの分析にも触れたが、今回は紙面の制約により割愛させて頂いた。近々稿を改めて論じることにはしたい。

#### 注

\* 本論は、第9回日本語用論学会(2005/12/9 於桃山学院大学)における口頭発表に加筆・修正を加えたものである。会場にて貴重なコメントを下された諸先生方には、この場を借りて感謝申し上げます。

1 松井(1977)は、すでに昭和20年代(1945-54)にこの「迷信」が存在していたと指摘している。しかし、昭和20年代の中高年齢層にとっての言語形成期(彼らが幼児〜子供であった大正〜昭和初期)には「全然+肯定」が問題なく使用されていたはずなのに、その当時はどうしてそれを誤用だと思わなかったのだろうかという別の問題が生じる。当時の「全然」は「ぜんぜん」と発音されていた保証がなく、「すっかり」「まるで」「まるきり」の当て字として使用されていた事例もあるため、別の表現として認識されていた可能性もある。

2 「非」「無」「不」などの接頭辞を伴う表現が述部に存在するにもかかわらず、その文を否定文に分類しないことに違和感を覚える人も少なくないかもしれない。しかし、例えば「そのような行為は非人道的だ」という文は本当に否定文であろうか。「そのような行為は人道的ではない」という具合に否定文でパラフレーズすることは確かに可能である。しかし Bolinger(1977)をはじめ所々で指摘されているように、一見するとパラフレーズ可能に見える文同士でも厳密には意味やニュアンスが異なる場合は多い。少なくともこの文は、「人道的な行為」と「非人道的な行為」という2つのカテゴリーが想定されており、「そのような行為」が後者のカテゴリーに属することを強く主張している文である。前者のカテゴリーには属さないという主張はその結果に生じる含意でしかなく、語用論的な視点から考えるならば決して同義の文とは見なせない。

3 可能性の問題として、疑似肯定という類があるのなら疑似否定という類を想定することも可能であるはずである。つまり、肯定的な意味を持つにもかかわらず否定文という形式をとっている場合である。例えば「全然悪くない」という表現である。幸いにも、今回の調査ではそのような例は見あたらなかったが、述部に否定の「ない」や「ず」が含まれている場合は無条件で否定類としたため、今回はそこまで考慮していない。これは今後の課題にしたい。

4 公正を期するため、以下のようなどちらに分類すべきか迷った用例は「その他」として今回の3分類からは除外した。「古来からこの難事業に全然の績を収め得たる画工があるかないか知らぬ。」(夏目漱石『草枕』)

5 『日本国語大辞典』でも「否定表現との結びつきが強まるのは大正末から昭和にかけてである」としており、本論における調査と時期がほぼ一致する。

参考文献

- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman
- Croft, W. 2002. *Radical Construction Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, C. J. 1988. "The mechanisms of 'Construction Grammar.'" *BLS* 14, 35-55.
- 原田登美 1982. 「否定との関係による副詞の四分類 — 情態副詞・程度副詞の種々相一」、『国語学』128、国語国文学会
- 播磨桂子 1993. 「「とても」「全然」などに見られる副詞の用法変遷の一類型」、『語文研究』75、11-22、九州大学
- 柄沢 衛 1977. 「「全然」の用法とその変遷 — 明治二、三十年代の四迷の作品を中心として」、『解釈』264、38-43、教育出版センター
- 金田一春彦 1966. 『新日本語論・第三編』東京：筑摩書房（1975年第3刷）
- 北原保雄（編）2004. 『問題な日本語』東京：大修館書店
- 工藤真由美 1999. 「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」、『現代日本語研究』第6巻、1-22.
- 小池清治 1994. 『日本語はどんな言語か』ちくま新書
- Langacker, R. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 松井栄一 1977. 「近代口語文における程度副詞の消長 — 程度の甚だしさを表す場合」、『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』、737-758、東京：明治書院
- 宮内和夫 1961. 「「全然」の改新 — 「とても」にふれて—」、『実践国語教育』3月号、7-13、穂波出版
- 野田春美 2000. 「「ぜんぜん」と肯定形の共起」、『計量国語学』22(5)、169-182.
- 新野直哉 1997. 「「全然」＋肯定」について」、佐藤喜代治（編）『国語論究 第6集 近代語の研究』、258-281、東京：明治書院
- Sperber, D. and D. Wilson 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- 鈴木英夫 1993. 「新漢語の受け入れについて — 「全然」を例として—」、松村明先生喜寿記念会（編）『国語研究』、428-449、東京：明治書院
- 鈴木英夫 1996. 「「全く」の用法の推移と副詞としての特性について」、『山口秋穂教授還暦記念 国語学論集』、458-484、東京：明治書院
- Tomasello, M. 2003. *Constructing A Language: A Usage-Based Theory Of Language Acquisition*. Mass.: Harvard University Press.
- 梅林博人 1994. 「副詞「全然」の呼応につて」、『国文学 — 解釈と鑑賞』59、103-110、東京：至文堂
- 梅林博人 1995. 「「全然」の用法に関する規範意識について」、『人文学報』226、35-53、東京都立大学
- 梅林博人 2000. 「流行語批判とその背景 — 「全然」の場合について」、『相模国文』27、57-70.
- 若田部明 1993. 「「全然」の語誌的研究 II」、『多々良鎮男先生傘寿記念論文集』
- Wilson, D. and D. Sperber 1993. "Linguistic Form and Relevance," *Lingua* 90, 1-25.